

## 子どもたちの

## 眼差しへの向こうに

上原孝一郎

二〇一一年、名作『少年の日々』（丘修三 偕成社 三月）が文庫化され、出版されたことを心から喜ぶ。この本は、単行本として一九九二年に発行されている。教科書で読んだ記憶のある子どもたちも多い。四つの作品の一つ、「紅鯉」が教科書に採用されたからだ。今後文庫化されたことにより、さらに多くの子どもたちに読み継がれていくことを期待する。19年ぶりに作品に触れた。色あせることなく、当時私の児童文学によせた思いが蘇ってくる。私は四編の中で「女郎グモ」が、一番好きだ。女郎グモの死闘を通して垣間見られる子ども世界。残忍な残酷な世界だからこそ人に優しくなれる——そんな世界を作者は見事に描ききる。この本の解説に寄せた皿海達哉さんの児童文学への言葉が

また、すばらしい。「大人の文学」と『児童文学』と大ざっぱに分けると、その違いはほとんどないのですが、あるとすればその差は「正義感」があるかどうかでしょう。これほど端的で明快な文に出会ったのは、久しぶりだった。（皿海さんは「私は断言癖があるので」と断っておられるが）『ラブレター物語』（丘修三 小峰書店 九月）は、丘さんの文学性と皿海さんの理論を結実させた作品といえる。高学年の子どもなら経験したことのあるラブレターがテーマだ。六つの物語の前に丘さんの短いコメントがつく。だれもが共有できる問いかけに、自然と作品内に入り込み、読み進めていく。ところが、最後の作品は色調が違う。今までのトーンと確かに違う。「最後の物語は『ことばの力』をきみたちに伝えたくて書いた物語です」と、語るように、ラブレターが生きて働くことばの力として、私たちに獲得されていくのだ。ガンで父を亡くしたジュン家族の経済基盤は、弱くて脆い。母は三人の子どもを抱え、昼はパートで夜は食堂で働く。理不尽な出来事が家族にのしかかる。正義はないのか。ジュンはやがて、真夜中に見た母の涙のわけを知ることになる。母は、死の直前にもらった父からのラブレターに涙していたのだった。正義は弱い者がまっとうに生きるための勇気をくれる。つらさや悲しさを乗り越えさせてくれる。父のラブレターはまさに正義のラブレターだった。ジュン家族のためにだけあるラブレターではな